

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590200079		
法人名	医療法人 豊寿会		
事業所名	グループホーム ふれあい園	ユニット名	1号棟
所在地	都城市高崎町東霧島752-3		
自己評価作成日	平成25年4月20日	評価結果市町村受理日	平成25年7月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaizokensaku.jp/45/index.php?action=kouhyou_detail_2010_022_kani=true&JigyosyoCd=4590200079-00&PrefCd=45&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	平成25年5月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自立した生活が困難な入所者方に、医療的安心や尊厳を大事にしながら、生活出来るように支援を行っている。広い敷地の中で、時に窮屈になりがちな空間から、外への散歩や畑からの収穫の喜びを通して、都城といった土地柄の環境を提供しながらケアが行われている。また、ご本人の気持ちを大事にしながら、出来ること、出来ないことを把握しながら、その人にとって何が大事かを検証し、リハビリを強化している。同じ敷地内に医師がいることも救急時には安心に繋がっている。運営推進会議は10年近い実績を重ね、施設のあり方を外部の方と協議している。職員も希望者は積極的に研修に参加させている。センター方式の採用は開設当初から使用して、パーソンセンタードケアに力を入れている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームの敷地内には、新緑に輝く樹木や季節の花が植えられ、利用者は日常的に季節を感じ、外気浴を楽しむことができる。菜園には季節の食材が植えられ、旬の食材を日々の食事に利用している。職員は、利用者の一喜一憂を自分の身に置き換えてとらえ、「老いても心豊かに生きることを応援し、個性に共感する介護を目指す」の理念に基づき、利用者との日々のかかわりを大切にしている。また、管理者は、職員の事例研究にも力を入れており、研修の場で発表出来る機会を設けている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	折あるごとに理念を話している。新入社員には理念を作った思いなどを話して、理解してもらい、園としての方向性を示して、共有出来るようにしている。	理念について職員間で話し合いの機会を持ち、利用者への言葉かけや対応の仕方等、日々のサービス提供場面において意識づけがなされ、実践につなげている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一人として日常的に交流している	地元の活動として、地域の祭りへの参加や園の祭り、地元の幼稚園などと交流を図っている。	散歩時には、地域住民や学童とあいさつや言葉を交わしている。地域の保育園児の来訪やホームの夏祭りに地域住民を招待したり、管理者が認知症についての出前講座を行っている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々に園を解放して、認知症の勉強会を企画している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、最初からずっと開催して、地域の方に情報発信や相談など、意見を仰いでいる。	会議は、利用者と共用の居間で開催されるので、メンバーは利用者の日常生活に接しながら参加している。利用者が転倒した時の対応について、意見・要望が出され、ホームでの取組に生かしている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域のケアマネ会に属して、情報を共有して、実情など困難事例としての相談など、密に連絡が取れる体制にある。	市担当者は運営推進会議メンバーでもあり、管理者は日ごろから連絡を密に取り、協力関係が継続している。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月の勉強会に拘束委員会を作り、職員に周知を図っている。また、玄関も施錠は夜間のみ行っている。	管理者および職員は、身体拘束についての内容と弊害を認識している。拘束委員会を設け、身体拘束をしないケアの実践に努めている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止委員会で毎月話を行い、予防に努めている。また、虐待と思わずなされている場合もあるので、どのようなことが該当するのか、検討を行うようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	園の新聞で後見人制度について広報したり、その他、医療の相談にもっている。実際に手続きの為に助言し、利用されている方がいる。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は必ず読み上げ、難しい部分は内容を詳しく説明して、相手が理解されたか確認を行い、承諾をもらっている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会などで、家族同士で話し合いをしてもらい、課題が出せていけるようにしていく。意見はミーティングで話し合い、家族に回答している。意見箱の設置をしている。		家族会や来訪時には、何でも気軽に話せる雰囲気作りを心掛けている。ホーム便りに加えて、職員は毎月、利用者の日々の様子や連絡事を手紙に記し、報告・連絡している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回、職員と個人面接を行い、また、飲み会などの交流で意見や提案をざっばらんに聞く機会も設けている。		職員は、意見・要望を気軽に話せる体制がある。職員専用休憩室の検討や利用者の安全を考えて、滑り止めマット利用の提案など、職員の小さな気づきもサービスに反映させる取組がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員が年休などを取りやすいようにシフトを組み、努力に対しては特別賞などの制度を設けている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	宮崎県の社会福祉会やグループホーム、介護労働センターなどの研修に参加させたり、県外の研修も参加させている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宮崎県認知症高齢者グループホーム連絡協議会や近くのグループホームとの交流会を通じて情報交換、勉強会を行い、水準の向上を目指している。			

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	センター方式を用いてアセスメントを行い、本人の思いを知るようにしている。また、施設として、センター方式の勉強会に参加させている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には毎月、精神面、身体面の状況を説明し、現在どのようなケアを行っているか報告し、家族が安心してもらい、家族の思いが私たちに言いやすい関係作りを実践している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他の施設の紹介、ご本人に何が必要かを家族に情報提供しながら検討している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理などの下ごしらえをしてもらいながら、話を発展させたり、畑のやさいの作り方を指導してもらったりしながら、感謝や楽しみにつなげている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族に本人の思いを伝え、また、家族の思いを知り、両方の思いを知る事で、互いが良い関係でいられるように橋渡しの関係を自覚して、交流を図っている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	情報収集に努めて、神社への参りなどの支援を行っているが、遠方の方は支援が難しい面もある。しかし、なじみの場所などのドライブなどを行っている。	利用者の友人、知人の来訪がある。なじみの神社に参拝したり、家族の協力を得て、墓参りなどを支援している。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	テーブルの配置に気を配り、話が弾むように話題を提供したりして、利用者同士が話せるきっかけなどを提供しながら、支えあえるように支援している。			

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所に対しては情報のやりとりを行い、特にご本人が喜ばれることや、悲しまれることなどのケアに対しての情報のやりとりを行っている。時に訪問もある。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの希望などは、センター方式で把握に努めている。なるべく本人が満足出来るようにスタッフとも話し合いながら、支援に努めている。	センター方式(認知症の人のためにケアマネジメント方式)を利用して、利用者の思いや意向の把握に努めている。声かけを行う時は、せかさずタイミングをとらえて話しかけるなど、利用者一人ひとりに合った対応をしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族にアセスメントを記入して頂いたり、在宅時のケアマネに情報を頂き、プランに活かしている。また、本人の得意な事は園で再現してもらったりして、楽しみにつなげている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	記録を会話形式に行い、本人の言葉を拾い、本人の心身の状況の把握に努めている。また、ケア者が気づきがあるときは、生かせるように検討会を行い、本人の把握に努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	プラン作成前にスタッフと話し合いを行い、情報の意見交換を行い、プランに生かしている。モニタリングも行い、必要な解決のための情報には、家族の方からの解決へのヒントをもらいながら、計画を立てている。	アセスメントや意見交換、モニタリング、カンファレンスを職員全員で行い、現状に即した介護計画を作成している。ホーム独自の「ケアプラン実施状況」を作成し、家族にも報告している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録には書き方の指導を行い、みんなが共有できる言葉で行うようにしていく事で、本人がどのような状況か把握出来るようにしている。そのことで変化の状況も捉えやすく、気づきも多くなっているし、プランにも生かしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の経済的な状況にも考慮して、いろいろな情報を発信していく事で、園の特性などが理解され、信頼関係が構築され、相談が出来るやすい環境を作ることで、家族がいろいろな選択肢を持てるようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の情報は、運営推進会議などを通して情報を把握していく事で支援に繋げ、買い物や地域の資源、たとえば公園などを利用して、楽しみにつなげている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医を持つことで、家族から安心してもらえるようにしている。また、経営者が医師なので、救急時の搬送先などスピーディーに対応出来ている。入院時や退院後の情報も確実に入る事で、身体的なケアに生かしている。	かかりつけ医および協力医との納得が得られる関係を支援している。受診における通院は、家族の同意を得て職員が同行している。診療情報提供書を整備し、情報の共有を図っている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が3名いる事で、日常の医療的な関わりが出来ており、介護職にも変化についての視点などが指導され、早期に異常発見が出来る体制が出来ており、家族の安心となっている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先は、経営者の医師と家族との希望で決められているが、入院先との連絡などを定期的に行い、退院に向けての準備も行えるように取り組んでいる。家族とも調整を行い、部屋の確保などに努めている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に家族との意向を確認して、重度化した場合の対応について説明を行い、理解を得ている。また、ターミナルケアの実績や出来ること、出来ないことなどの具体的な事は何度もその都度説明を行って、安心につなげている。	家族の意向を受け、終末期に向けた話し合いは早い段階から行っている。指針および同意書が整備されている。利用者や家族の意向を踏まえ、医師や看護師との連携が図られ、重度化や終末期に向けての体制がある。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故や急変時には、すぐに医師と連絡体制が出来ており、夜間は隣接地に救急医がおり、安心感が確保されているが、職員にも定期的に指導が行われている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に訓練を行い、全員が災害に対応出来るようにして行く事で安全を確保している。また、地域には老人の施設であることの周知を図り、強力を依頼している。	家族を交えての合同訓練や昼・夜を想定した防災訓練を年2回、定期的実施している。利用者の避難場所の確保がある。また、地域への協力については、色々な場面を通じて働きかけを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	必ず苗字で呼び、本人の尊厳を大事にして行く事については、入社時に指導を行っている。介護保険上の秘密保持についても、労働契約と一緒に提出してもらっている。		職員は、利用者一人ひとりを年長者として敬意を払い、言葉かけや対応時には、誇りやプライバシーを損ねないよう心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の意志決定の場面は、入浴や食事、リハビリなどの場面では行っているが、帰宅したい希望は、家族の意向と本人の思いが一致せず、調整が難しいが、本人の思いは家族に伝えている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一応園の流れはあるが、ご本人の意向や外出などに対して、休憩時間などを調整しながら、本人の思いを実現出来るように、スタッフも強力出来る部分は強力をもらいながら、本人の園での生活をサポートしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧品などをそろえて、化粧を積極的に支援している。また、希望者は結髪も行っている。衣類はご本人に選んでもらっている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は、その日にスタッフが食べることにより、味付け、硬さなどを確認したり、一緒に食べる事により、嚥下の状況を確認する機会となっている。		ホームの菜園でとれた旬の食材を利用者と一緒に下ごしらえや調理を行い、同じテーブルで共に食事を味わいながら楽しく食事ができるよう、雰囲気づくりも大切にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	検査結果がダイレクトに入ることにより、カリウムや塩分、糖などの調整を行っており、また、水分はチエックをつけることで過不足を把握出来て対策を早めに打つことが出来る。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアを積極的に行い、異常時には家族と連絡を行い、訪問口腔ケアにつなげて、早めの治療につなげている。			

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄は回数も多いので、ケア者にとっても大変であるので、起立が出来るように、メニューを起立訓練や膝の訓練をすることで、可能にしている。また、日中はオムツを外しを積極的に行っている。	職員は、利用者の「トイレに行きたい」の言葉を大切にしている。利用者一人ひとりの排せつパターンを把握し、日中は布パンツを使用するなど、オムツ使用量の軽減に努めている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳の導入や芋類を畑で作り、提供している。また、歩行訓練などを行い、腸の刺激を行っている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人で入浴出来る方は、自由に入浴出来るが、都合で入浴出来ない時は、必要に応じて入浴を行っている。午後からの時間設定ではあるが、毎日入浴出来るように、どちらかの棟で沸いている。	入浴を拒む利用者には、理由をアセスメントし、声かけの仕方や入浴時間を調整するなど、本人が入浴を楽しめるよう支援している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりがゆっくり座れる椅子や部屋で休める体制にしている。また、天気の日には布団を干して、快適に休めるようにしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情は必ず保管している。薬の副作用はその都度、全員に申し送りを行い、異常は医師との連絡を密に行っている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の中で、出来ること、出来ないことを知り、出来ることをやってもらいながら、楽しみにつなげている。また、時々本人が好物の料理をリクエストしてもらい、意見を取り入れて作っている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家族との調整を行いながら、墓参りや自宅への外出を支援している。また、美容院や神社への参拝など個別対応を行っている。公園の花見などのドライブも行っている。	利用者は、その日の体調や気分に合わせて、敷地内の菜園や庭園で日常的に外気浴を行っている。家族の協力を得て、外出も支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	1号棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っている人、持っていない人がいる。近くに買い物をする場所がないので、一人では難しく、買い物は園にくるパン屋さんなどに限られているが、意欲のある人はスーパーに時々ではあるが行けている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への電話などの要求は行っている。手紙は書かれる事が少ない。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	みんなが集まるところは季節感が分かるように、一緒に季節の物を作ったりして飾っている。テレビの部屋は、音が部屋まで届かないような設計になっている。	玄関や居間には季節の花が生けられ、採光、室温、流れる音量など、居心地良く過ごせるよう配慮されているが、居間に置かれたソファが柔らかすぎて、利用者が腰かけた時、身体が深く入り込んだ姿勢になり、立ち上がるのに無理がある。	利用者が日中多くの時間を過ごす居間は、自分の力でその人らしく過ごせる場となるよう更なる配慮を期待したい。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間やプレイルームで、それぞれ気のあったもの同士で話しているが、一人になりたいときは部屋で過ごされている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の理解が得られるように、持ち物を持ってきてほしいと何度もお願いしている。要望に応じてくださる家族もあるが、温度差がある家族もある。しかし、本人が荷物を持ってこないでいいと言われる方もいらっしゃる。	居室は清潔感がある。季節の花や縫いぐるみ、家族との写真、時計、カレンダー等が置かれ、その人らしい居室となるよう配慮がなされている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	部屋の入り口は名前を記入している。リハビリに力をいれ、自分で移動が出来るだけ長く続けるように、歩行訓練や手すり訓練を行い、転倒などにはカーペットなどで対応している。			